

論文「妄想世界の二重構造的性」* への回顧

内沼幸雄

Yukio Uchinuma

編集委員会からの依頼は、論文の研究眼目、その際の苦勞、その後の研究の発展、今日的意義などを語り、若い精神科医自らが新たな精神医学の潮流を形作っていく手助けをせよ、ということのようだ。そんなに買いかぶられたら、かえって気持ちが萎縮する。要するに、堅苦しくなく勝手に大法螺を吹けということだと諒解し、思いつくまま気ままに語ることにした。ともあれ、このような機会を与えて下さった編集委員会に感謝を申し上げる。

(1) 私の現在症

私はいま、精神科病院で外来診療をするかたわら、療養病棟の古い精神病患者の相手をしている。もう高齢化して病的体験もなく何処が精神病なのかわからない好々爺もいて、いったい精神病とは何だったのかと疑問を抱かせる症例を散見する一方、発病後かなりの年月を経てもなお病的体験を抱え持つ患者もいる。とはいえ、後者が抱く妄想も形骸化し、どこまで患者の実存に根付いているのか何とも頼りない事例も少なくない。しかし、そう思って安心していると、ある日途方もない妄想を語りだし、吃驚させられることもある。たとえば、71歳の老婆を外部の病院に受診させようとした時、恐怖に怯えて抵抗するので聞いてみたところ、地元出身の元総理大臣の暴虐ぶりを語りだした。この総理は患者の預金通帳から勝手に金を引き出したり、家具を持ち出したり、家に放火

したり、娘を刃物で切りつけたりして悪事の限りを尽くし、平然としている。そう患者は妄想し、今もやられていると執拗に思い込んでいる。そう言いながら患者は、病院内にいる限りは聞き出さなければ妄想は語らず、春のバス旅行、納涼祭、運動会、文化祭、クリスマス、調理教室などの病院行事にはそれなりに楽しそうに参加し、内作業も淡々とこなしている。その姿は町で見かけるごく普通の老婆である。これは二重見当識といわれる現象で、総じて多くの患者はこの二重見当識から脱却し得ていないようである。

私も高齢化するとともに世界は平板化し、ある好々爺の患者が言うように平々凡々の毎日が過ぎるのをただ傍観している有様で、人格の平板化という点では私も患者も同じだが、二重見当識から卒業できない患者が少なくないのは驚きである。

(2) 二重見当識と急性期の妄想体験

妄想世界と現実世界を並立させて生きる二重見当識は慢性化した統合失調症に特徴的とされている。どうしてそのような生き方が可能なのか、思えば、摩訶不思議なことである。この摩訶不思議さに統合失調症の精神病理の本質を垣間見ることができるのではなからうか。もしそうだとしたら、同一の問題が急性期にも見られるはずである。

確かに、その通りなのだ。その点を解明したのが私の妄想論であることは、「妄想世界の二重構造的性」⁵⁾という論文名から窺い知ることができよ

*文献5) 参照 (本論文・参照文献とも学会会員ホームページに掲載します)

著者所属：医療法人群馬会群馬病院

う。なるほど、慢性期と急性期では患者のあり方は違っている。慢性期では、急性期の妄想気分や妄想知覚は目立たなくなる。だが、本質的には相互に通じ合っているのである。違いがあるとすれば、急性期では妄想世界と現実世界の相互のせめぎ合いが熾烈をきわめ、その体験に耳を傾ける者の心を震撼せずにはおかないという点にある。

(3) 妄想世界の二重構造的性

私は校正時には何度も読み返すが、その後は二度と読む気が起こらない。つねに先へ先へと考え、後を振り返らないことを鉄則としていたなどというところ格好がいいが、要するに横着者なのだ。老齢の身になって改めて読み直し、もう縁のないその若々しい情念と野心がいま懐かしく思い出される。

私は東大精神科に入局して暫くの間は小児の夜間睡眠脳波の研究に専念していた。その頃徹夜しながら、ぼんやり脳波記録を見つめているうちに、精神科医として何か満ち足りないものを感じていたのだろう。入局して間もなく先輩の小木貞孝先生（作家の加賀乙彦氏）が中心となって企画した、専門の哲学者を囲んでのハイデガールの『存在と時間』やサルトルの『存在と無』の講読会に畏友高野良英君と一緒に参加した。当時主としてハイデガールの影響を受けた人間学的精神医学が脚光を浴びていたが、正直申してその内容たるや、そのご本尊のハイデガールの足元にも及ばない代物であることに気づかされた。私はハイデガーより作家にふさわしく具体的事例を挙げて論ずるサルトルに惹かれ、『存在と無』や『想像力の問題』を何度も繰り返して熟読し、その明晰かつ雄大な思索に深い感銘を受けるとともに、あまりにも明晰すぎて歪められたその人間観に強い反発心を抱いた。そして反発心を抱くほどに私はサルトルの良き理解者なのだと自負し、後に『存在と無』の基本骨格に関して厳しい批判を展開した⁷⁾。

ここで私の論文に話を進めることにするが、その論文はサルトルの考え方に色濃い影響を受けたものである。したがってその論文を理解するにはサルトル哲学の知識が不可欠である。限られた紙

面でそこまで論ずるのは無理で、読者各位にそれぞれ勉強してもらえない……。と、そこまで言ってしまったら身も蓋もなくなる。そこでやや平板な図式的説明になるが、できるかぎり平易にかつ発想の原点に限って解説することにしたい。

(i) 妄想知覚に関する Schneider, K.⁴⁾ の二節性理論と Matussek, P.¹⁻³⁾ の形態心理学的理論

私の理論は決して単なる思いつきから発したのではなく、精神医学の地道な研究を継承し発展させたものである。Schneider によれば、妄想知覚は二節で構成されており、了解可能な意味、解釈、象徴意味などを伴った知覚が第一節である。妄想知覚の特徴はこの知覚に第二節として（多くは自分と関係のあるような）了解不能な異常な意味付けが加わる点にある。こう考える Schneider に対して Matussek は、このような要素心理学的な知覚論では、二節に分断されたままで生き生きした体験は見失われてしまうと批判する。現実の生の体験では患者は、異常な意味を対象そのもののうちに見て取るごとくに (anschaulich) 直感しているのだ。このような体験の直接性を捉えるには、形態心理学的な見方が不可欠である。その見方に立てば、知覚の変化を明らかにすることが可能である。すなわち、妄想知覚が明確な形をとって結晶する以前の段階について研究してみるならば、知覚の変化として、知覚対象の「本質属性の優位」と「知覚関連性の弛緩」を見て取ることができる。患者はこのような知覚変化にもとづいて、対象世界の新たな意味関連を構成する。いわゆる妄想内容とは、言葉に表現しにくい本質属性の優位した、微妙な知覚変化を概念的に把握しようとしたものなのだ。

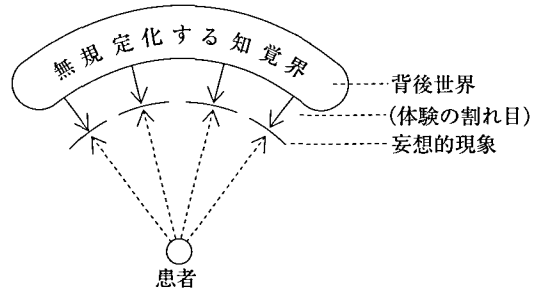
両者の捉え方の違いを一点にのみ限って述べておくが、前者では思考の障害という内的要素的機能の障害が想定されているのに対し、後者では知覚の変化という、外的な対象世界の変化が重視されている。つまりは、対象意識の障害を基本にすえた見方である。二節性理論を批判して体験の直

接性を蘇えらせようとする Matussek の試みは注目に値する。確かに患者は、異常な意味内容を対象そのものうちに見て取るごとくに直感するのである。Schneider の見解は、生の体験を捉えるには余りにも論理的でありすぎた。

だが、Matussek の形態心理学的理論は真に体験の直接性を回復し得たであろうか。断じて否である。ここで安永浩⁹⁾ の文章を借用するが、患者の直接的体験において、患者の妄想への信念は一方「直証的」でありながら、他方絶えず「疑い」の上に立つ。一方で「当然」なことのように思われながら、他方たえず「意外性、狼狽性」がある。自分が世界に影響を与えているようであるかと思うと、他方世界によって全く操られているようでもある。自我内容は漏洩してゆくかと思うと、他方痛烈な外力の侵入をこうむっている……等々この種の矛盾はなお多数にあげることができる。特にふしぎなのは、こうした矛盾的二面性は同時にすら共存し得るようであり、患者自身そのどちらとも言いかねるような、渾然とした一体をなしているようにみえることである。

患者が実に生々しく体験しているこのような矛盾的二面性は Matussek の理論からは絶対に導き得ないものである。また、知覚の中から「一段高い現実性」が間接的・暗示的にものを言っているかのようなものであるという、極めて特徴的な妄想知覚の特性も、その理論では説明不可能である。なぜそうなるかは、二節性理論の難点とも思われかねない両節間の懸隔に安易な架橋を試みたことによるのだ。両節間は思考障害による懸隔どころか、二節性という言葉では言い尽くせない絶対的な断層が生体験それ自体にあるのだというのが、私の発想の出発点となっているのである。ちなみに、単なる懸隔というより、すでに Schneider が示唆的に、二節性につきまとう不気味な異様さに言及していることを忘れてはならないだろう。

そのような断層を認めながら、なおかつ体験の直接性を活かそうとするのは、誠に無謀な試みであって、そもそも体験それ自体が成立し得なくなるのではないか。研究の際の苦勞を語れという編



図

者の注文に応じておくが、私は当時繰り返し絶望感に襲われたようで、どんな夢のお告げがあったのかどうかはわからないが、夜間突然目がさめ、自分の試みは根本的に間違えているのではないかと愕然とし、何とか脱出口を求めて何度も眠れない夜を過ごしたことをいま懐かしく思い出す。ハイデガーやサルトルの果敢な思索が心の支えとなったのか、私はもともと横着者であるにもかかわらず、諦めることなくあれこれと考を巡らせた。その結果、私の見解はますますその射程を広げることになったのである。

(ロ) 妄想世界の二元相克的力動構造

ここでは限られた紙面の関係で、得られた結論のみをいささか図式的に述べておく。まず図式的構造を示し、その構造力動を解説しておくことにしたい。

その解説に入る前に、これまた図式的にサルトルの知覚とイマージュ（想像意識）の違いを表で対比的に示し、若干の説明を加えておく。

サルトルはまず、想像意識の対象物はイマージュであり、私たちはそれを知覚の対象物に対するように観察するのだとする古典的学説を斥け、イマージュも一つの意識であり、知覚と同様に即自的物物に対して特別な関係の仕方をする意識であると捉える。こうして両者をまず対象意識だとして同一の場に立たせておき、そのうえで両者の違いを対象物の違いではなく、その対象物に対する関係の仕方（志向の仕方）の違いのうち求めて

表

知 覚	イマージュ
i) 対象物の存在を指定する。	対象物の非存在ないし不在を指定する。
ii) 観察の現象 [対象物は側面の連続, 射影の連続として現れる。そのために, 対象物について学習される必要があり, 観察を深めれば深めるほど, 新しい細部が開示される (豊饒性)。いわば, 識知*は徐ろに形成される。豊饒性の裏面として錯覚の可能性。]	準観察の現象 [対象物の現れ方は射影性をもたない。対象物に対して観察するような態度を示しても, 学習されるものではなく, そこには既に知っている以上のことは何一つ見出されない (本質的貧困性)。識知は直接的で決定済である。貧困性の裏面として直接的確証性。]
iii) 対象物は独立した個性的存在性 (「個別化の原理」) を持ちながら, 他の対象物と無数の時間的空間的決定関係 (意味関連性, 或いは, いわゆる「道具関連性」) を通して現実世界として構成される。個々の対象物は, この世界を背景として, 且つこの世界に位置づけられて現れ, 決して背景から剝離することはない。	対象物は一般性の指数のもとに思念され, 個別化の原理には従わない。イマージュとしての対象物は, 二・三の決定関係を持つのみで, 本質的に断片的, 孤立的であり, 世界としては構成されない (すなわち, 真の時間や空間を持たない)。この非現実的対象物は, 現実世界の土台の上に, その世界の否定として現れ, 現実世界から剝離した, 借物の存在物しか持ち得ない。
iv) 受動性	自発性

* サルトルは, 知覚とイマージュをとともに識知 *savoir*, 感情性, 運動性などから成る総合的心的作用と考えるが, この場合, 識知は明晰判明な概念として直ちに取り出せるわけではなく, むしろ対象物の意味として直観的なものに変質し, 対象意識の綜合作用のなかに融け込んでいる (この場合, 識知は「減弱的変質」を起こすのであって, 無意識化するのではない)。この意味で, 対象意識, そのうちでも特に個別化の原理には従わないイマージュは, 極めて曖昧な性質を伴っており, 概念的思考にくらべて *archaisch-primitiv* な性質が強い。

いく。一言で述べれば, 対象物の存在を指定するか非存在ないし不在を指定するかの違いである。両者の意識のあり方は深い断層で隔てられているばかりでなく, 両者は相反する指定の仕方から相互否定的な関係のうちに捉えられている。

この相互否定性が弁証法的に働けば, 世界はより豊かな姿を現すであろう。ここで私の妄想論を結論的に述べるが, 要するに, 妄想知覚とは, イマージュを通して実在の対象物に“出遭おう”とする, 言い換えれば, イマージュと知覚を合一化しようとする無益な試みであり, その結果相互否定性は空回りし, 奇異で欺瞞的な二重構造的な世界を構成することになるというのが, 私の妄想知覚論の骨子である。その奇異な世界を図式的に示したのが, 先に挙げた図である。

この二重構造の構造力動の要点のみを説明しておくが, ここでいう力動は統合失調症の心理力動論に資する可能性はあるかも知れないが, 決してそのような大それた試みではなく, 一つの体験を構成する構造内の構造力動を素朴に記述しておこ

うという意味であることをあらかじめ述べておく。以下, この力動の要点を羅列しておこう。

- (a) 知覚とイマージュから成る二重構造的な抱え込む妄想知覚という一つの直接的体験において, 両者の意識間の断層は“体験の割れ目”となって現れる。この体験の割れ目をめぐって袋小路の力動が展開される。
- (b) イマージュを通して実在の対象物に出遭おうとすれば, 相互否定性が働いて知覚対象の意味関連性は失われる。しかし, 知覚の存在指定までが否定されるわけではない。知覚対象の意味関連性が失われ, 知覚界は無規定化するのみで, かえって知覚対象は不気味な存在となって露呈する。意味がわからないがゆえに誠に捉えどころのないその存在は圧倒的な力を帯びて, 妄想知覚体験の“背後世界”を構成することになる。
- (c) イマージュもこの欺瞞的な二重構造的な世界において変質をこうむる。本来自発的なはずのイマージュが呼び出す像は, 体験の割れ目を

介して背後世界から間接的暗示的かつ断片的に示されたものとして体験されるようになる。いわば、イメージの自発性は体験の割れ目を軸として一転して他律性へと逆転し、これによってイメージに存在措定をしているかのような現実性が、いやそれどころか「一段高い現実性」が付与されるに至り、患者はそこに聖なるもの、あるいは魔性的なものを見出す。それは強烈な迫真性でもって患者の心を捉えて放さないのである。このように変質化したイメージの像を私は“妄想的現象”と名付けることにした。

このような二重構造化理論でさらに何が得られるか、二点に限って追加しておく。

(d)イメージでは準観察を特徴とするが、準観察であっても見て取るごとくに直感することでは知覚と変わらない。このようなサルトルのイメージ論を援用することで、MatussekのSchneider批判をかわすことができる。患者は妄想知覚において見て取るごとくに体験しているのだ。Matussekのいう本質属性の優位がどういう意味内容かいささか不分明なところがあるが、彼がその点で小児や原始人の心性に通じていると述べているところから判断すると、それはイメージのもつ archaisch-primitiv な性質と同質のように思われる。また、知覚関連性の弛緩もこの二重構造化理論ですでに捉えられているのは直ぐおわかり頂けると思う。

(e)私が最も注目したのは二節間の懸隔である。Matussekはそれを安易に架橋しようとしたために、妄想知覚体験自体に内在し患者の心を震撼させずにはおかない不気味さが見逃されてしまうのである。私の妄想知覚論では、二節間の懸隔は知覚とイメージを隔てる深淵に由来し、妄想知覚体験では体験の割れ目——この割れ目は形を変えて安永浩⁹⁾のファントム理論の鍵概念として活かされていると私は我田引水的に考えている——となつて現れ、その割れ目をめぐる構造力動からいま述

べた不気味さを解明することが可能になる。イメージの直接的確証性は不気味な背後世界の存在によって侵食され、その結果、妄想への信念は一方では「直証的」でありながら、他方絶えず「疑い」の上に立つことになる。また、一方で「当然」なことのよう思われながら、他方たえず「意外性、狼狽性」が付きまとう。イメージの自発性が体験の割れ目を軸として他律性へと逆転するとすれば、自分が世界に影響を与えているようであるかと思うと、他方世界によって全く操られるようにもなる。すべては必然性で彩られているようであり、不気味な存在の露呈によって生の偶然性が露出する。こうした矛盾的二面性は二重構造化の構造力動からおのずと導かれることになる。

私の妄想知覚論は二節性理論と形態心理学的理論のそれぞれをともに活かし、発展させたものであることを、これで理解して頂けると思う。それはともあれ、二重構造化は急性期の緊迫した様相を失っても根強く残り、慢性化した患者の二重見当識にその名残を留めているようである。

(4) その他についての雑感

以上のほかに、この論文では妄想知覚にしばしば先駆する妄想気分も二重構造化のもとで捉えうるとし、さらに同じ構造力動にもとづいて得体の知れない奇妙な他者が出現する妄想世界のナルシシズムの構造や二重構造化と迫害妄想・誇大妄想・宗教妄想・色情妄想との親和的関連性に論点を広げていった。妄想知覚論から患者の世界内存在のあり方に迫ろうなどと、よくまあ、欲張ったものだと思う。もう紙面もつきかけ、たとえば知覚の無規定化といっても患者の理性に呼びかけてみれば正常な知覚をなし得ているように思われる点をどう考えるかといった問題などがあるけれど、それらの細部にまで言及する余裕はないので、興味ある読者は原著に当たって頂きたい。ここでは若干その後の研究の発展に触れておく。

私はその後、対人恐怖の心理力動構造に興味を

抱くとともに、サルトルから離れて間柄性の人間学ともいえる和辻倫理学に関心を移していった。対人関係の間柄性に戸惑う対人恐怖の心性を知るには、間柄性の人間学が格好の支えとなるように思ったからである。和辻を勉強してからサルトル批判はあっさり深まっていった。何よりも衝撃的だったのは、対人恐怖が視線恐怖段階に至るとパラノイア的となり、サルトルの『存在と無』が描き出す相克的な人間関係を顕わに示すようになることであった。そこでパラノイア問題の歴史を回顧するとともにパラノイア問題と深くかかわりをもって概念形成がなされてきた二大精神病の心理力動について、対人恐怖の心理力動構造にからめながらそれとは対比的に人間学的アプローチを試みてみた⁶⁻⁸⁾。その結果、統合失調症圏では「地獄とは他人だ」という標語が、また躁うつ病圏では「地獄とは自分だ」という標語がふさわしいという見解に導かれることになった。ここで誤解のないように言い添えておくと、地獄が天国に反転しうることも臨床的事実であることを念頭に置いて頂きたい。もう与えられた紙面の関係で、詳細は私の著書に当たって頂くよりほかにないが、この標語は二大精神病の鑑別類型学にも役立つのではないかと、私は考えている。

(5) あとがき

人間は夢を持たなくては生きていけない。その夢が私たちの生活を豊かにしてきた。だが、それで安心していられるだろうか。夢の実現が人類の終わりの始まりかも知れないのだ。人類はいま現実からの逆襲の脅威にさらされているのではないか。たとえば、地球温暖化などなど。いま論文を読み返してみて、かつて未来への希望を託して野

心的に提示した論考が想像力の悲劇を描き出してたことに複雑な思いを禁じえない。想像力の生み出す終末論を身をもって示す患者から、私たちは何かを学び取らなくてはならないのではなからうか。たとえ脳の病気であるにしても、その病気を持つ患者の生き方とその意味するところに絶えず関心を抱くことは、今後とも大切なことのように思われるのである。老いの問題一つ取り上げても、それは脳病理研究の専売特許ではないはずだ。精神医学が脳神話に終始するようなら、もはや精神医学の終わりと言っていいだろう。

文 献

- 1) Matussek, P.: Psychotisches und nichtpsychotisches Bedeutungsbewußtsein. Nervenarzt, 19; 372, 1948
- 2) Matussek, P.: Untersuchungen über die Wahnwahrnehmung. Arch Psychiat (D) u Z Neur, 189; 279, 1952; u Schweiz Arch Neur, 71; 189, 1953
- 3) Matussek, P.: Wahrnehmung, Halluzination und Wahn. Psychitrie der Gegenwart, Bd. 1/2; 23. Springer, Berlin-Göttingen-Heidelberg, 1963
- 4) Schneider, K.: Klinische Psychopathologie, 4. Aufl., Georg Thieme, Stuttgart, 1955
- 5) 内沼幸雄: 妄想世界の二重構造的性。精神経誌, 69; 707-734, 1967
- 6) 内沼幸雄: 対人恐怖の人間学。弘文堂, 東京, 1977
- 7) 内沼幸雄: 羞恥の構造。紀伊国屋書店, 東京, 1983 (対人恐怖の心理——羞恥と日本人。講談社学術文庫, 東京, 1997)
- 8) 内沼幸雄: 正気の発見——パラノイア中核論。岩波書店, 東京, 1987
- 9) 安永 浩: 分裂病の論理学的精神病理——「ファントム空間」論。医学書院, 東京, 1977